



普及版

吉川英治人物選集

越後に強兵の制を敷き、家臣ことごとくの信愛を集め得た上杉謙信
覇道を競う好敵手・武田信玄との
虚々実々の外交戦、遂に川中島に
戦端をひらく——歴史に名高い決
戦の両雄の用兵の妙と綾なす心理
を描ききった迫力の戦国ロマン。

吉川英治

上杉謙信



人物選集 上杉謙信

昭和47年11月27日 初版発行

昭和63年7月30日 第21刷発行

著者 吉川英治

発行者 賀来寿一

発行所 株式会社六興出版

東京都文京区水道2-9-2 〒112

電話東京(943)3431 振替東京 1-92448

印刷 株式会社萩原印刷所

製本 株式会社明泉堂

落丁本、乱丁本はお取替えいたします

©1973 Fumiko Yoshikawa, Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

ISBN4-8453-1504-1 C0093

六興版

吉川英治人物選集

上杉謙信

吉川英治

六興出版

生ける駭あり

この正月を迎えて、謙信は、ことし三十三とはなった。

まだ弱冠といつていい。それなのに、服色も装身の総ても、ひどく地味好みであった。長袖の羽織も山藁織の鶯茶の無地ですましている。大口に似た袴だけが何やら特殊な織物らしい。またいつも好んで頭巾をかぶり、新春の装い綺羅やかな群臣のなかにあつて、にこにこ無口に衆を見まわしている。——どう見ても臨済の若僧がひとりそこに交っているようであつた。

「どうです、他愛ないものではありませんか。これですから、わが部下というものは、可愛くありません」

座を隣あわせている右側の人へ、謙信はこう話しかけた。

関東管領の上杉憲政は、

「まったく」

と、うなずいて、更にまた、その右隣にいる貴人へ向つて、

「越後衆の義勇に富むことや辛抱強さは、夙に、四隣に聞えています、かように無邪気で、多

芸の士が多いとは、いや初めて知りましたな』

と、微笑を伝えた。

貴人というのは、この中に、ただひとりの都の公卿^{くけ}だった。熊野どの、熊野どのと仮称^{かりなづか}しているが、実は関白家の嫡^{ちやく}、近衛前嗣^{きんゑまへつぎ}なのである。——ことし永祿^{えいりく}四年という天下大乱の中を、いかに正月とはいえ、こうした荒武者ばかりの席に平然と臨んでともに酒を酌^{しやく}み、ともに飲を尽しているこの公卿も、いわゆる花鳥風月だけしか解さない堂上の人とはすこし類^{るい}を異にしているようである。またそれには、こういう武人の一群に対して、何らか求める大志を抱いているものということもほぼ想像がつく。

しかもここは、上州麻橋^{うまやばし}の城内である。京都からいえば、まだ多分に地方的野性のみを想像されやすい坂東平野の一角である。すくなくとも当時の貴顕^{きけん}がこんなところまで旅するには、よほどな覚悟と目的がなければできなかった。

初春^{はつしゅ}なれや 明けたり

おもしろの世や 今日なれ

生れあわせつるものかな

ときしも

国々こぞり立ち 国々たたかう

よべの夜雲と 消ゆあり

暁の出づ日と 燃ゆあり

国つくり 人の世めくる

いまなれや ものふ

生きてこそ 人みな

またとはなき 生がいかな

草の根も喰め。

正月七日は吉例の賜酒の宴だ。お国訛りを交ぜてこんな長歌を今様調で謡っていた越軍の若ざむらい達は、ついに挙って起ちあがり、手拍子あわせながらこの城楼第一の大広間も狭しとばかり、輪をなして踊りめぐり踊り流れ、きょうの生命を、心ゆくまで楽しませていた。

信玄の影

「連年、正月は征途で迎えるのが、このところ吉例となったようです。去年は越中の陣中でしたが、さて、来年はどこでするやら」

謙信が、ふと述懐しながら、隣へ杯を乞うと、上杉憲政は、甚だしく済まないような顔して、『関東のいめしを統べる管領たるわたくしに、その力がなく、四隣御多事のなかを、遠く御援軍を仰ぎ、恐縮にたえませぬ』

と、いった。

謙信は、彼の心事を察して、

『あなたからそんなお言葉を聞こうとて、申したわけではない。わるくおとり下さるな』と、なぐさめた。

積年の宿敵、甲斐の信玄とは、三年前の永禄元年、ひとまず和議が成って、

(今後は善隣として)

と、親睦の約定をとりむすんだのである。

だから表面、越軍にとつて、この方の憂はずまいように見えるものの、結果としては、却つて、干戈を交えていたときよりも、彼の敵性は、陰性となり、謙信にとつて、始末のわるいものとなつていた。

信玄の政治的手腕は、あの峽山の国にありながら、実によく諸国の内部へまで喰いこんでいる。わけてその外交的な遠謀と智慮にかけては、若い謙信のごとき、到底、あの百鍊の巧を経た緋衣の僧将の頭脳には敵すべきもなかった。

去年、越中へ出征したのも、富山城の神保一族がうるさく国境を侵すので一揉みにふみ潰すべく出馬したものであったが、平定の後、それらの残党どもを縛りあげてみると、信州訛りの者がたくさん兵の中にいたり、信玄の息がかかっている門徒の僧兵が交っていたり、また、常に往来した機密文書などが無数に発見され、結局これも、躍らされた信玄の影——なるものであったことが明らかにされた。

だが、この影なるものは、始末がわるい。一方を掃えば、またべつな一面に躍って出るのだ。世上でよく、

（信玄には七人の影武者がいて、誰が信玄とも分らない仕組になっている）

と沙汰するのも、彼のこういう謀略的性格の変幻出沒をさしているのかもしれない。

さて去年、越中に出馬して、辺境の乱を討伐した謙信は、居城春日山へ帰って、鎧を解くいとまもなく、またまた上州麴橋の管領上杉家から、

（至急、関東へ来援を乞う）

という出兵の要請に接した。

敵は小田原の北条氏康である。北条の勢威は、しきりに近境の里見、佐竹などの小国を脅かし、いまはその圧迫にたえない状態にあるが、管領の上杉憲政に訴えても、すでにそれを抑える實力もないし、放置しておけば、ついに乱は上州一円にも及んで、管領家の自立すら危うく思わ

れ出したための悲鳴であつた。

然諾、ただちに謙信は、春日山を雷発して、上州へ南下して来た。それが去年の八月。ここ厩橋城を本拠として、房総の小国を糾合し、彼の小田原攻略の大策は、いまその半途にかかりつつ、明けて永祿四年の新春を、この城中に迎えたわけであつた。

遠征すでに四カ月、戦いの前途はまだ期し難い。こう長陣となれば、士気を倦まさせることが肝要である。――で、今日のように時には大いに飲んで高吟放歌に気をはなつのも意義がある。そう眺めやりながら謙信は満足そうであつた。客の近衛前嗣も楽しげに見えた。ひとり上杉憲政だけは、

（こんなことでいいのか？）

と、ひそかに愚えているものらしく、いつまでも酔えない顔いろであつた。

しかし、この歓宴も、紊れるまでにはならなかつた。各自限度を心得ているのだ。まず、最も放逸に踊ったり謡ったりしていた者から真つ先に、

『よいほどにしよう』

『これくらいにしておいて』

と杯を納め、そして配膳の係へ、食事をうながすと、各々、大茶碗をかかえこんで、真面目に飯をたべていた。

——と、そこへ、四、五名の同僚とともに、寒そうに鼻を赤らめて、外から戻って来たものがある。末座から遠く主君や客のほうへ礼をすると、その一組は、大勢の中へ割って入り、すぐ箸と茶碗を持とうとした。

謙信は、遙に見つけて、

『下野ではないか』

と、呼びかけた。

咎められたと思つたか、その中のひとり斎藤下野守は、あわてて容を正し、

『ただ今、戻りました』

と、礼をし直した。

『すぐ飯はならぬ。まだそちは飲んでおらぬらしい。これへ来い』

と、謙信は、杯で磨いた。

斎藤下野

斎藤下野はおそるおそる主君と貴賓の前にすすんで行った。そのすがたを、近衛前嗣は眼もは

なはず見ていた。どうも驚いたという顔つきである。越後にもこんな侍がいるのかと思つたらしい。その斎藤下野とは、一口にいえば、見ツともない小男というしかないが、その上に、左の一眼はつぶれているし、足は跛行をひいている。

だが、謙信としては、可愛い部下に變りはないらしく、下野が貴賓に対して、極めて遠慮がちに坐りかけると、

『もっと寄れ』

と、手ずから盃さかずきを与え、そしていうには、貴様は大の酒好きではないか、折角、きょうの好機を逸して、朝からどこへ行つておった、日ごろの口ほどもない不手柄者ではある——そういつて、謙信は、笑いながら叱る真似した。

下野は、いただいた盃に、拝をして、飲みほした後、

『実は、御先祖の墳つみへ、墓まいりに行つてまいりました。早晩に出て、御酒宴の前までには立帰つて来るつもりでしたが、古いにしよの蹟は草に埋もれ田と變り、なかなか見つからないものですから、つい遅く相成りました』

と、答えた。

『あ。そうか』

謙信はふと嚴肅げんしゆくに眉をひき緊めた。思い出したからである。この斎藤下野なるものの祖先は越

後ではなかった。この麻橋城から数里の東にある生品郷の産れである。上毛の平野生品の郷は、建武二年、時の朝賊足利尊氏を鎌倉に討つべく新田義貞とその一族が天兵たるの忠誠を誓って旗上げたところとして誰知らぬものはない。

わけて謙信は、この上州へ出馬してから、二度もその地へ行つて義貞の霊を弔っていた。彼は、建武の忠臣が、いかに憤つて草葬からふるい起つたか、あだには把らぬ弓矢を敢て把つたか、そしてついに国に殉じたか——を征途の夜々の眠りにも考えずにはいられなかった。そして草むす生品の辺をさまよい、幾多の英魂に心からな血涙を手向けては歸つた。二度目にはその辺に仮ながらの官祠を建てたほどである。

この人こそ

由来、謙信は多感な質である。激しやすく感じやすい。二十歳ごろまでは、ままた女のごとく泣くことすらあった。その前後には、多感なるばかりでなく、多情の面も性格に見られたが、翻然、禪に入つて心鍛をこころざしてから一変した傾きがある。といつても多情多感な性は、もとより持つて生れたもの、禪によってそれが血液から失くなるはずはないが、その強烈を挙げて、

将来の大志へ打ちこめて来たのである。大義には哭くが、小義には哭かない。怒れば国の大事か武門の名かで、平常は至極無口になった。たいがいなことは、切れ長な臉の辺で笑っている。ちと、壯年者には似あわないがそういう風格に變じて来た。

そのかわり理想とするところへは独往邁進、着々と無言で進んでいる巨歩のあとが窺える。そのもつとも偉なのは、上洛臣下の礼を、彼のみは怠らずにしていることである。

京都と越後との距離は、小田原の北条より、甲斐の信玄より、また駿府の今川家よりも、どこよりも遠かった。けれど信玄も義元も氏康も、各々自国の攻防と一身に氣をとられて、まだその拳のないうちから、謙信は、天文二十二年のまだ弱冠のところに逸はやく上京し、時の將軍義輝を介して、朝廷に拝し、天盃を賜わり、種々の献上物を尊覧に入れなどして、臣謙信の把る弓矢の意義を世に明らかにしていた。

つづいて、おとし永祿二年にも上洛した。度々の彼の忠誠に、朝廷におかれても、御感懐はいうまでもなかったが、関白の近衛前嗣などは、ひそかに彼のために案じて、

(遠隔の地、こうお留守になされては、御本国の領も、さだめしお心もでないことでしょう。あの御守備はだいじょうぶなのですか)

と、訊ねたことがある。

すると、謙信は、

（ほかならぬための上洛。領土のことなど、一向に捨置いてもかまいません）

と、答えた。

いま割拠する諸国の群雄にとって、血まなこ、血みどろな、第一の関心は、その領土である。

寸土尺地にも鎬を削りあつて他事もない有様の折である。そのなかで謙信のこのことばを聞いた関白前嗣は、

（この人こそ）

と、彼に真実を認めた。見込んだのだった。応仁以来の道義のみだれと、朝廷と臣子の道すら怠られている国風のすたれを嘆いていた折なので、謙信の一言はいたく前嗣の胸をうった。かかる武将なれば何を打明けまたどんな大義を託しても——と、以来、熊野牛王の誓紙をかわして、ふたりは深く朝廷のために誓いあうまどとなった。

この正月を期して、遙々、前嗣のほうから下向して来たのも、表面の理由よりは、かねてふたりの胸にそういう心契もあるからだだった。

『ほう……。ではお許の御先祖は、この地の新田一族のものか』

前嗣は、ふと、謙信と下野とのはなしへ、傍からことばをさしはさんだ。

祖 恩

直接、声をかけられたものの、答えてよいかわるいか、下野が恐懼きょうぐしている容子に、謙信が、『お答え申しあげよ』

と、促うながした。

下野は、片眼を、ちらと、貴賓に向けて、

『おたずねを賜わって、畏れいます。祖先齋藤藏人くらんどは、名もなきものにござりますが、義貞公お旗上げの折より、御一族の脇屋殿の手について、鎌倉攻めに参加し、後、分倍河原ふばいかわらのたたかいに、討死をとげました。——首を埋めた墳は故郷の宅址たくしにありと聞き、同じ土地の出の衆五、六名を誘って、あちこち尋ねましたが、よう分りません。……茫々ぼうぼう、いずこも田や草原と変り果て、土地の農夫どもすら、たれも弁えおりません』

『では、越後へ移られてからは、もう数代になるのじゃな』

『四代になります』

『ああ、それでは……。越後にはなお、新田一族の裔えいが多くおられますか』

これは、謙信に向つて、直接に問うたのである。謙信は、思案までもなく、

『ここだけでも、下野を初め、五、六名おるとあれば、春日山城には、まだ何十家も、同じ流れのものがおりましょう』

と、すぐ答えた。

前嗣まへつぎは、大きくうなずいて、

『さこそ。さこそ』

と、繰返し、

『ほまれある御裔とも思ひもよらず、さきほどからの率爾はゆるせ。盃をとらそう。下野とやら』

と、自身から進んで来ないばかりにいつて、手をさしのべた。

下野はいよいよ恐懼して身をちぢめた。四、五十名の一小隊をあずかる侍頭に過ぎない身分を顧みて、思案に余るものらしく見えた。

『おうけせい』

主君のゆるしに、ほっと、面を上げると、下野は、こういった。

『何の功もありませぬに、身に余るお盃は、おそらく祖先の功を思召されてかと存ぜられます。てまえ一個がいただいておくには過分。お盃ぐるみ頂戴して、ほかの五六名の衆にも頒わけ、帰国